



0 1 2 2^m 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 JAPAN

物語後篇 梅花春水卷之四

第拾七齣

止爭一語貞操

南仙笑楚滿人編述

東都

虎と見て云ふ立矢の急力岩をよどみを獲のどとく。俱不義天の仇と
孫らの孝子。終は本懐を達せんとりゆす。猪も寵次郎。三子四兵
衛。ホハ年來の仇。うる衰文太をあきる直う。す。元サトとものひる
長吉さく。薦呈せ。うが教かず。大方うらず。禪院が深き情を感佩
し。まことに。一刻もちやく。既國もぐ。す。四喜房。支原。源三喜房袖祭奉
秀ひ。行自行公。へ。人の志のむども。彼へあげとりゆよ。す。四喜房。ハ
詫。次郎よひひ。私事では是まで町人ふく。五斗米は腰とがらず。耕

走り登ひ。纏て着る市中隱者圓前の方より、巴を賣る者と云ふ。壁に立つて、何をうなづく。頬見し袖外事。初からう町人百姓と邊の唐琴の壁前へ立す。公せん者の事あるべく、ありつまでも不便を加へ。四呂付ひ下さり。妹由裏里存命であくべ放場を立てて老の樂とまづきの事ととまづく。死人の數すりま。俗平山海どの事。長吉との世よがた人と隠ひよ。再種生せ。うへ我子は愛ひ老のかとうへ死難ひ。禪作ともう。安どけようかとひのひのへやとらす。経海禪修もなれ。ひ長吉の蘿生み。昔の長吉あくべ父をもへ母もと死を孤獨。うきが漏玉房捨ひぬく。養子とらずば。袖外の入門より代り。

跡忠勤をすまへ。我へとまづ立別和尚も諸国より來。御美運ふ倣へてと飄然と立ちと習へと止ひる源次郎。子四三房支拂ふ。宿も彼を。何國ともなく知行けり。斯く源次郎ハ袖外を拂ひ。旅の仕度とく二種の宝を大切に守り本貫さて登りける。去程ふ往きて。栗橋のところへ来けり。袖外ハ源次郎よりひそめ。大切の旅日記を正すもだつて。と奈何せんと當惑の体を源次郎見立。ハ何をさぶつての事。悔むまゝ。取く返す持来る。ア。その内音ハ袖外がきあひ。所ぞえりそ。たゞ我ふ遣すへと袖外又別且お拂ひたゞる後の方。うも。旅高をもきくも。がくへ此の荷を脊脇ひ。うき。うか。おきむか。壯俊噴く。家をみみば。方こう何方へ通つる。ア。まつ。金丸。

最前より呑みたまひへ居つて。同じく腰こしへ煙管取つて吹
きあがら倅おとこも今日の騒さわぎきまのどく覺おぼゆきど又千般のうきあき。
不図彼の旅离たびりの持る煙たばこを入いれと見るよ何とやらと覺おぼく。左
きが商人しょうじん今まじひ卒そつをあがら早はや下くだの持もつえの煙たばこを入いれと我わは早はや
とひふ最さい易やすたまよと。然しか次郎じやうらは度たがせが然しか次郎じやうらハ度たがせりと見る
ふ李り白しらが鶯うぐいすを冠かぶす窓まどと勝かつる田質たぢと金物かなものよおできくべうもあ
らぬ我特わざの皮かわと皮嚢かわのうとうよや轡ひのき仕合あわせけわ奈な所ところよ
う。

答ふよ旅人へ氣を乞ふ。はるが久國のひよ候りやと。もーく
おて向ふよさと巴小字秘藏せしふよとんび。似てうとうやせ
が奈何せよと。口ぶりど公の裏かへ。猪の這奴をゆかの聲麻の縄
みて簡よと總みて我所持のふを盜み取つてゆのるゝん。され
こそと訓く。物の言ひざゑと。おひこも。ニキホンとひ當つて
と。心中よ油のみせ。やうそ栗林の園所よひじま。鹿治郎の園守よ
向ひ唐琴^{うき}次郎とヤ者うひとと名氣つて通る。彼の族高も同へ
姓名をひのつた通り。中田の駅を越へ古賀の松原^{まつばら}にてから時生^{とき}
かの旅人龍次郎^{むすめ}に向ひ。身はりへ我煙^{えのき}を入ふと覺へあくやと
同上。とてひのひをひづへ。奈何よすはづくと見れ。所持の事

下總佐倉の辻後^{さか}ふと。盜まれしとわひて。おきにうきにと
貴^きく持居らしゆ家^{いえ}屋^やみと。何うせと。是の旅人を信と
おがまへ。左手とあくめ亡^{なき}一死も防^{さへ}余^よの並木の松原上^{じょう}物語^{ものがたり}
駄市を越へ三百両を奪ひて。路とくとまきよ。その盜賊^{ぬし}の美
少年^こかく名ハ龍^{りゆう}と。せらひゆのと。毎年我父室宿^{むろすく}。千本廊^{こう}脇^{わき}と
清^{きよ}といふ者の方より。壁^{かべ}か差^けこして。敵の聲^{こゑ}と送^{おと}ふ。ふへ則^{ふへそ}
は裡^{さと}衆入駄市^{だいち}の辻^{さか}三郎^{さんろう}。汝^{おの}は逢^{むか}と。国を立退^{たた}き。諸国^{よし}とさげす
今日只今敵^{のぞ}めぐり邊^へり。敵^{のぞ}へせよと。一腰^{いつよ}の柄^{つか}と。舞^{まい}
昇^{あが}めよ。拂^は負^ふくと。結^{むす}よ。と。龍^{りゆう}次郎^{じゆぢやう}。大^およ舉^あめ^ま。金^{かな}く人達^{ひとたち}
心^{こころ}御^ごある。心^{こころ}と。だつて。かく。食^くが終^まり。ひつまをきのうづく



佐倉の千本屋作壽房とうひの辯議^{じげ}を運^は出^だせ^し。折柄^{おりがら}我^わが^わすく追^お。
嘗^{なま}て上^う列^{れつ}の絹商^{きぬしょう}人は^は近市^{ちかいち}ど^とこ^そら^ら今^{いま}一箇^{いっ}退^{しりぞ}糧^{りよう}を^をト^と送^も渡^{わた}。
世^{よの}の無浦鬼^{むらうき}平次^{へいじ}近市^{ちかいち}ど^とこ^そら^ら今^{いま}千^{せん}の金子^{きんし}を^を貯^{たま}ふ^くけ^く。故鄉^{くわ}へ^への日^ひ、吾^{われ}身^みが^が武^{たけ}舟^{ふね}へ^へる日^ひと同^{ひと}日^ひ近市^{ちかいち}ど^とこ^そら^ら船^{ふね}を^を宿^{すく}。宿^{すく}と^とた^たく^く行^ゆき^く跡^{あと}我^わが^が立^たて^て船^{ふね}を^を引^ひ續^{つづ}て^て旅^{たび}を^を終^し。松^{まつ}原^{はら}へ^へり^り。
何^な者^{もの}か^か打^う燈^{とう}を^をけ^く碑^ひを^をう^あり^り。あ^あり^りの附^{つき}合^あいの圍^{いざな}湖^こ二^{ふた}箇^ごハ^は多^{多く}食^く。そ^そを^を遙^と遠^と。最^{さい}前^{ぜん}の櫻^{さくら}の葉^はの天狗殊^{こと}々^{こと}無^む化^かの所^所ある^{ある}。あ^あく^くと^と沿^ひて^て食^く。且^よ且^よ生^ま益^{ます}のあ^あく^く。借^{うけ}ハ盜^{ぬす}城^{しろ}を^を人^{ひと}を^を殺^{ころ}害^{さむ}。我^わが^がある^{ある}を^をて^て保^ほ持^{もち}と^とか^か燈^{とう}を^を消^す。影^{かげ}を^を隠^{かく}せ^しめのうらうと^と推^すし^すう^うを^を入^る。

何^な所^所の人^{ひと}よりか^かのあ^あく^くざ^ざり^り相^あ富^とみ^みる^る。近市^{ちかいち}ど^とのうらうと^と。作^{つく}り^ね身^みのあ^あく^くざ^ざり^り。ま^ま煙^{えん}草^{くさ}入^る。そ^そ以^い前^{まへ}う^うす^す。あ^あく^くと^とね^ねと^と塗^{ぬぐ}付^け。と^と其^{その}怪^あす^すよ^よ捨^{すて}む^む。何^な人^{ひと}う^うと^と盗^{ぬす}み^み。
近市^{ちかいち}ど^とのうらうと^と。は^は煙^{えん}草^{くさ}入^る。あ^あた^たへ^へ。我^わ仕業^{わざ}そ^そお^おせ^せ。あ^あく^くも^もう^うみ^みのう^うらん。我^わも^も實^{じつ}見^みの敵^{てき}を^を討^うう^う。天^あ運^{うぶん}可^かひ^ひけ^く。は^は程^{ほど}武^{たけ}志^しの國^{くに}萬^{まん}師^しの邊^へ。年^{とし}來^き昇^{のぼ}ね^ね。仇^{かた}よ^よめ^めぐ^ぐ合^あ。首^{くび}尾^{くび}充^あ敵^{てき}を^を討^うう^う。今^{いま}本^{ほん}国^{こく}信^{しん}列^{れつ}へ^へ。是^{これ}は^は敵^{てき}と^と彼^{かれ}が^が我^わ身^みよ^よつ^つま^ま氣^きの毒^{どく}も^も有^ある^る。ふ^すく^くて^て一^{いつ}面^{めん}威^い五^ご猪^{しゆ}底^{そこ}の近市^{ちかいち}ど^との四^よ子^こ息^きと^とあ^あは^は外^{ほか}も^もう^うす^す。共^{とも}よ^よ敵^{てき}を^をも^もう^うる^る。助^{すけ}太^{たけ}刀^{とう}を^をも^もう^うて^てあ^あせ^せに^に犯^{はん}る^る拙^{しやく}者^{しゃ}が^が山^{さん}底^{そこ}を^をふ^くて^て推^す索^さ。

本草綱目 卷之四

五

望びしる白刃の中へ。我身をかせよ口へ入らに纏次郎ハ詫く
彼の法陣と見ゆ何とやらん見と覺えあるやうあるも。と不審けふ
墨也ハ吾らへからくうまで。松よおひ知りて。柳も何處の故あつて
は筆ひそめやましゆやと同様く法陣ハ双眼より涙とほめ君に解す
覚へり。さむが心子ハ忘却する。佐倉の町やく千本屋死焉と云ひ
て達篠の活業せり。の年君我家は道高せざる事。娘
羅経とまくひきづらう縁の端。もとものも死とあらわの跡つと死無
のひとまくぬうち。圓窓うる延市どろびあ干の金子を持て留國
の日と君が如きの日と同日つゝ。延市とひま夜
の明方駅たまひの松をかく。何者とぞあひて殺害よあひゆり

正義の傳不落て。あひて。あひて。の正義の傳不落て。町人の
性根うる常平はく。國家すむ妻へく。治つてあらねといひ。何故。農を
まく。益城の音ひきあうと。縣令の役人。すそきといひ。又上別
ひら。延市どくちうらの方。すそきのうへ。妻へく。治つて。敵の證据と迷う
たる。提唇。まほ。あゆ。娘か花か。娘か花か。ふう。採とたての。き書
鑑とあくべり。自署して。免とくると。安く。令更鑑太郎が不便と
きく。あくべり。うむ。娘の。百半の。おひや。と。あくべり。衣と。あくべ
り。娘と。おひ。その折まで。延市と。居。お。重浦。恩平。次。あ
り。ト。金者。避。き。坐と。あくべり。引捕つて。餘儀と。かうじた

逃亡を以て、隠れ大勢よりかゝる捕入とひらめくひきよ。
旅の季の内をあへて見下す。縣令の布告の如きは入る
俗の三百西里を益城入船へと極つて、縣令の総管を
通じて、さもどりて、さうしゆの家根と爲して何處へ進つて其處
まことに、差し遣ひとぞ更ふに急がきよ。されど是より龍次
郎の仕事のあくへ立つて、と緒の眞宗書状より上列する
縣市さぬの四子息郎と郎さぬとやうんの方へは、遂に最も
國とまざり、ひひむ宣ふるべずと、一ゆゑ、途絶つて黙正
ち、察する所、今四方の凶傷よびひた。間違ふとぞ、
まごよ老が男を詰ます。まづまづせうめ少子ハ娘と申ひ

て世小笠みるけよが生岸からひす。剣變してあまねく諸國の
靈場を順序するも、一トよへ君よ遠まつてせうば娘が清き土壇の
わども彼へあげと、さともかく雲水行脚の身となる。甲
斐ありく今のうちに君よあひまつせ。娘が探のあらゆるを
りあへ、君の心によう只、遠の内向か在傍も藏の經らむ。
かふまつて供養うへやひうそつげまつてせうば娘が本丸す
あらず、弥三郎どのふまづ上、は疑ひとたら、是うハ鬼平次が御
走をさうへて本望をとげらるべし。その鬼平次が面体陰好い。そま
がくが強そろじ、妻へ委へてもあへやすと、もと聲く、弥三郎も
まづ疑念を散じ、さてさあうにありけるかくのまことい言ひを

最前の不穏のびんぐ。真年ぬくよくと波て瀧次郎。
何が猪某へ入れない。皆亡父へ孝経のもの。手
取る。吾も大脱せり。教が体よ跡を郎も漸かもの。
再び懲り法師。もひき。敵鬼平次とゆうんぐ入共骨柄。
奈らやと同。又懲り法。美。年頃ハ十三四。百く眼中も。く。
又丈高く。骨太く。ひくすま一曲あらば。うるうる。眼も。く。
ひきつけ。掠さばべり。又は豈。郎今よ敵の醜。さへあら
ざり。うど世よとく。う美か年。と。し。這裡。ま入。を。證据。せ。せ
あ。今。其人。歌。う。そ。と。外。よ。敵。あり。と。い。ど。報。も。あ。何
とい。證。据。も。く。何。所。を。當。か。何。を。使。つ。よ。け。ま。ハ。敵。を。さ。手。ぐ。る。

あや運転く。申。歎病死。する。又。公府。捕へら。と。真。も。あ。う。
何と。せ。懲。一。や。と。不。覺。の。涙。か。む。び。」。と。懲。法師。瀧次郎。も
連め。うね。る。折柄。又。袖助。彼の。旅日記。を取り。來り。此。体。死。ぬ。
見。て。何。ま。つ。や。と。驚。き。迫。よ。る。ふぞ。瀧次郎。ハ。え。り。へ。と。ま。を。物
ご。倍。き。バ。袖。祭。慶。く。ま。く。と。き。ハ。危。き。ま。う。り。け。と。その。身。ま。を
吹。ひ。ける。他。も。瀧。圓。公。ハ。宿。妻。の。尾。を。残。く。あ。た。と。ま。が。立。前。れ
こ。り。よ。瀧。次。郎。も。敵。半。二。種。あ。た。へ。ひ。ま。が。道。よ。服。取。う。く。上。の
見。て。一。刻。す。早。く。坂。国。志。け。き。ハ。名。義。情。一。け。き。ど。弦。三。郎。よ
別。ま。と。立。上。る。よ。跡。三。郎。さ。と。君。み。ハ。運。日。出。度。敵。と。お。ひ。せ
坂。國。み。と。う。と。う。義。一。け。き。り。く。我。も。胸。男。の。ど。く。敵。鬼。平。次。と
き。く。



からてが首掛く故ゆへ三日も
あくべりうだりうとろとばくらしと
口惜一洞ようきつるまご。寵次郎
弥三郎をそげまさんとりゆせう。
允父兄の歎をあ著ふ。皇天の衰
あるのみ。諸天善神の守りをす。バ
何条を意とどげどとりある。あえ
や。ゆゑく。陥れともよ身を大切
めち。持ゆ。とりと叮寧よ言ひさと
必ず我國へもはきう。昇るのと
必



委しくかへり。生を幾よ居ゆ
とす。名残ハ尽ト。と二人が三方にそ
よう。是ゆく。ひのうちハりうちん。
斯く。はは。御三房主。嫁の道。ち
諸国。の。壘場。をめぐり。かう。本國
下総へ立つて。て。の。庵をいざる。
爰よ。とみく。娘の。が。ひ。と。も。り
ひ。が。八十。余。年の。壽。と。こ。の。ち。目
か。度。大。生。を。そ。げ。と。う。え。

算拾八齣

得時梅残芳

且説唐琴の龍次郎へ日向らず本国へ着て真島殿へ附目見す。
首尾よく兄の歎蓑文天をあきとて弟子を言上ひ。于四三達ま
が石室情袖々が忠節梅の木のふるは古鏡の威徳もどももく
りめぐ。ひやうきうきとふくらむよさあけ
物語アリ水姿女院と稱。若四郎の力を差上け玉が貞元公にとうひ
みのわうづ原木高發四郎ハ浦左衛門つたへるふ又水姿院
よから威徳ありしも全く汝が孝ひ皇天のあこぎみおひく歎蓑文天
が癡病を治へ本意と云げさせひひふる小疑ひしき玉バニ
永く汝が家の家とゆきをばとき外うづげ物教えりハリケ玉バ
次郎ハ家の面目あはれと余りと奉うてうりらへヤ。臣前をまうじけり。
斯くて瀧次郎目撃を兄の歎を紹へと彼女達の雄渠こゑ

寿をくあり日毎よ客の経簡き。門前市をうへよけるときより龍
次郎ハ吉日をあくみえ彼タ一袖々がわねよ飲食れ忠信移動の者
うまべ。侍よ歎立つて。厚くこゑを賞むける去る頃よ龍次郎
ほ前の匂覺へもちでく。近ちの隣ともせつけられば一家中より
縁組せと。陞むのまうりけまと。龍次郎ハちの旨あきバとく。
悉く折りけりかうとけまと。履自ら公ハはゆをぬし。或時龍次
郎を通く至。故りつまでも獨身ふくあらて早く妻をむろも。一
のち、高後と終きての不孝の不忠。さうと宣すよ龍次郎曰。吾の内徳みへ
えども。お真まきのとあく。心紫とひちだく。もし探を立ねき能
えぞ。ゆゑ。摯く妻をやとす。とひを室へ。うへ。親族の方

う養子うつてらへ一室を繼せ。苗跡の経きとりすまある
すれどもと障りうがら存はとや上るみと。自乃ム歸す。如の
ふま跡一き出處うづり本妻ハ。すまくも姿をかへ忠臣の種が
のとと。一とそき人を機みゆひ。ふ幸ひ貞行公の因縁序よ初か
時う。官仕せ。白糸とよぶる女由緒を。かくす。容後とりひ
かとりし耻。くわい性を。ふそありも至く。貞実する氣質ある。工。
忠臣所のよくあつてもすしけ。正両方の口縫を。ふと彼の白糸
と龍次郎が。舞よや。きみつけ。瀧次郎も。あぐ。口縫
り。早速よびむ。うつむきく暮しけ。かくて右の老翁を
書狀よあつて。東う。子四喜源。翁。おが方。告け。正両簡す。

奈何と。あせ。よ。代。妻。便。を。ゆく。教。ざ。う。き。う。一。初。く。う。と。子。四
喜。翁。の。原。ま。の。と。く。海。空。と。薦。し。ゆく。活。業。と。く。源。喜。翁。長。寿。も。家。業。
と。と。が。三。足。こと。と。き。門。て。簪。を。つ。く。み。信。を。以。く。交。う。り。き。ば。隣。里。鄰
黨。の。徳。よ。う。ミ。一。枚。ふ。不。孝。の。子。き。不。孝。の。娘。と。往。ゆ。の。道。を
譲。り。老。と。教。し。初。と。あ。ま。か。其。風。大。ひ。よ。化。し。ゆ。く。懸。今。彼。一。正
天。晴。の。こ。と。う。の。と。と。子。四。喜。翁。と。梅。と。植。き。地。所。と。湯。の。小。梅。源。喜。翁
長。言。あ。す。と。と。と。よ。ほ。う。び。と。下。一。か。ま。猪。子。四。喜。翁。と。忠。義。感。す
き。其。宿。る。あ。と。と。梅。堀。と。と。び。生。き。と。梅。と。と。源。喜。翁。堀。と。皆
う。ま。ら。あ。と。と。あ。ま。と。張。を。が。字。と。所。の。字。と。と。て。永。く。そ。の。忠。義。貞。節。を。の。と。と。と。
あ。と。作。よ。と。四。喜。翁。と。源。翁。が。矣。年。の。積。善。の。余。慶。あ。と。と。れ。て。詔。が。と

都
行
卷
之
四

三

因よりといひ一入身ある挂びらうとよろひゞ新退小女のかとまた
夏哉と聲きりあへて去ら程よを日暮びけまび被の痛
糸がきをかゝる金燭銀燭のどく许多の幫同歌妓居並び美酒
佳肴山海の珍味所せんまで舞うべ之馬の上乗よも直の大至を
隆くはれ遠離故よ故をとせ寛くと産へてゐる体所ゐるやうす再よ
さむる大江山の酒呑童子よ彷彿へり先づ一番よ當りへ轉向
きと
三昧八仙と呼ぶがまくち後つて扇正腰よかへあそく今人昔くゆき
墨も何某事とよざる傾城金よ何ぞうよぞう似跡のあつて全貌
わざが新達先生が三昧八仙の物語りへ詰めり縫まで皆仰尽つて是
袖立わざくお姿へて三昧八仙を擇ひりまく左のものなど其

名所と自地よりそんば導りあまが皆おへりかう折角はせ
斬の腰を折るも張合ひてとらば之馬のむぎひ皆くそうの
間が笑をきかぬ言ひどりへりを。ひるべ三昧八割とぞりと
まくヌモ跨きつ。僧そり傾城の亭をとりゆ世よ拂うる御見
放逸うる生と。彼の傾城を責むる。終よ責難せ。謫吏あ辱
風間や形をあくすう。あらゆはせく。夜更く山便を下り
きうち。ひうをあくまの客人這家よりう。夜更く山便を下り
ゆくと階下を下りと見る。階子の中程よ腰とす。夜更く山便を下り
くと宿居をもあつき女あり。彼の客へこまと見え。是や一處牆
きよ。今日う明日うとひ苦多う。あらがる進止をみてやあらえ

ぢらんと向ふの用をとて。又一階へあづらへとまう。彼女は赤椅子
の中程よ段をたまく居る。何とキツニ氣味こよく。あじぐ
傍を通り。椅子を上を切り。頃不圖やうアフル。彼女も始めて
あわむきたる顔をアホにひつ。目と鼻もろくのつぶらやう
こゆんりの怪物うつて。客ハコトリカく氣を失ひて口語をと
一座ハ顔見合方がひもとぞ可笑け。二番ハ歌妓峯吉が墨笔
よからぬ漫活。まことひどく。思ひ。次ハ若者牛ハが墨筆
の怪絶こまく。昔くら。聞古くする物語さみて身のものよごうや。ど
だく。四番目ハ四谷雜談かすりよう。九十九番多く六小続
繪。吏の切ぬきが多くの生を正し。すまく。繰り修くる。百番目



を
番よ當る。岡大尼の鬼平次が今近箇の結ハ悉く破れへま
とがたりふく。実よあことやら無とやら。もとよりは疊居也
果もざる。君自ら見ゆ所の怪徴あり生涯に亘りとぞひく。
やといよ大勢多口同音也。又大尼が例の纏延とて我を云ハ
がせり。と岡く因澄を顙よき。いづくこそのまゝせらば
す活よあらず四年前の事也。我下緒の彷彿する。何ぞ
とらる狂態よあらず。わ寢せし上忍の緒高人三百両の金を
携へ國へ販ふと彼より不圖要をとり未夜深きときよひよ
てと。あり追付勒ころ。三百両を奪ひたりと月旦。バ人の立居。本
血刀を提げぬあつ刀主。バ人あらずで石のせあそ時秋戲れふ

地獄どもうむふすびす人ふみ居りまひとひよ。不^吉善やる縁の
翁をりす。已ハいざれど我りすと宜ひ。バ歎く。毛弊そろとせ
あふとす全くひの迷ひあらんとを假其所とすまつ。今と緒
國を偏廢。野よ伏^フ山ふも伏^フと經くと見て。乃ちとす
ひと見^フ。身^フうきりとくをば耳^フ身^フの毛^フももと。齒^フ根^フあが
あひゆさりと始る初^フのあご^フ齶^フもぎた。障子^フとさうと押廻^フひと
の仕候。白刃^フを携^フ。久馬^フを傍^フ。白眼^フ抑^フ我^フを難^フと^ハ思^フ。人^フ廢^フ物
詔^フもし。上方の緒商人^フ縣市^フと^ハり者^フの序^フよ縣主^フと呼^フくゆゑ。
故^フ正絃^フひすと。四年^フ間^フの艱^フ絶^フ辛苦^フ並^フ大^フての草^フ木^フ。と
頗^フも妙^フす。澄^フ揚^フもえれ敵^フとあね。かと^ハり^フ、雲^フつむが壁^フ。

吉支の山へ念力岩をも通毛とや。神仏折合をうけ、念力が根より
さざれ、身なだれと風ひしよ。向むびびりての百物語已が思ふはものか
口から白狀のせいか自業自の。汝又ゆく故ゆく、周易觀音圓鏡久
馬と云ふの名、實は亀浦鬼平次とりて者もえん。ゆきまみゆふ
獨角あまたじゆを吹く圓鏡の海のせりとど等ひつまびりくす。
あらむに哉りゆふも我こそ実の男鹿山は五度の城ようせり。火車の轟
次とよぐる者うづが僻ト者とゆりや終よまぬとて折柄緒雲幕
とからんと般く三百両とうねり取りふ相違き。じきく返すよ
金てんぞ一刀を乞て立上るに大勢の幫同市社ともどもして敵強吉
みを乞ふまづお捨をけば、兩人の魔庭へありまつて、上一下虚

寒く火花をちらうて戦ひしが跡三郎が孝ひまるどん刀先よさすがの
鬼平次が刀法乱毛よろしく所とたみうけ、斬伏せ後よどみを
さしたたりけるば時彼の佐助ハ跡三郎をとめりとて一刀の間に令
さううひく年來尼せ一西の報ひうぐまくあらぐて、爰ま又
唐琴龍次郎ハ主用ゆくば國へ來り當兵の本陣よ道中一立すが。
敷賀屋は仇討あくと被取物も取りあへぎ。あきこゑ來りて、るふ被
きぬややまらうるねこちか
緒屋の跡三郎もくと覧へあり、鬼平次と戦ひげづの戦へあり
さぬよ大をよろこび亭毛とて、一五一十を物語せぬああま
ハ助太刀せとゆひくうちに何ゆく鬼平次をおもてけぎハ龍次郎
立ち、跡三郎どひ本陣を建せしと。さとそ欽ひうらうて、

ゆひへう唐琴。龐次郎。ありとりよふぞ。跡三郎ハこそと見て、あは
れをくへ云々のうと語る。不龐次郎も且感ト且歎ひ所の孫令
へ子細と言上。まゆゑゑくあきまうけ。バ。龐次郎ハ跡三郎を病ひ
本国へ歸り小串どへ右の姫奈をや上げ。バ。殿ハ跡よりづら一き
ふ思へて。忠臣ハ孝子の門よひとどりよ一箇うす一箇二
かる孝子の我邑よ集まへ。予う幸ひきとど跡三郎をも石うへき
士よ内取主厚く扶持へ。ひけ。跡三郎も龐次郎と兄妹のそ
日毎よ其安否を尋ねとひく。睦々交りける折より絶海禪師當國
斗轂の序龐次郎を訪ひるひけ。巴。龐次郎ハ大よ勢び殿へ頬ひ善提
所普門院ゆく。絶海禪師を發附とて七日七夜の大施餓鬼ま

藻の先様を下ゆ。兄浦庵齋。應菴。又紫翁を代號市。かく眞福と
りのつけ。七日満月の夜の更よと至らの。今い立よ限をもじ。後
羅道の苦銀をつづき成仏放免うすうをり。と。新豐よ。ゆり西の
飛去と。と。猪川を。死因法の徳を。怨美成仏させ。あひ
んと。飲ふるかぎり。跡忠勤と。おげみけ。白糸と。よ歸の申ま
え。と。あま。數多の子と。す。身ある。目。おま。身のみ。おほき。きけ。と。身。遠。書。繩。
其由を車。の。手。四輪。かか。方へ。ちへ。せ。け。と。と。と。身。限。と。
かく。せ。そ。と。折。と。消息。と。その。安否。と。ひ。睦。と。交。と。家。富。榮。と。何。と。ら。と。と。
身。と。さ。う。と。と。全。と。忠。孝。の。餘。慶。と。と。

作者 南仙笑楚滿人編

画工 柳川重山圖繪

○松浦佐用媛後編全五卷

近日出板

○美艶仙女香

一包四十文
縦引物
坂本氏

文政九年

丙戌正月

江戸

小傳馬町三丁目

丁子屋平兵衛

横山町三丁目

大坂屋半藏板

馬食町二丁目

西村屋與八

和漢書籍貢物處
西洋

群玉堂河内屋 岡田茂兵衛

大阪心齋橋博勞町角

